

(11) イチゴ
ア 殺菌剤

農 薬 名	成 分 名	系 統 名	FRAC コード	適 用 病 害 虫 名							注 意 事 項	
				萎 黄 病	う ど ん こ 病	疫 病	菌 核 病	炭 疽 病	灰 色 か び 病	芽 枯 病		
アフェットフロアブル	ペンチピラト	アミト	7		◎				◎			
アミスター20フロアブル	アゾキシストロビン	ストロビリン	11		◎			◎	◎			炭疽病については、薬剤感受性の低下が認められる。
アントラコール顆粒水和剤	プロピネブ	有機硫黄	M03					◎				
イオウフロアブル	硫黄	無機殺菌	M02		◎							
硫黄粉剤50	硫黄	無機殺菌	M02		◎							
オーソサイド水和剤80	キャブタン	その他	M04					◎	◎	◎		
オラクル顆粒水和剤	アミスルフロム	その他	21			◎						
オルフィンフロアブル	フルピラム	その他	7		◎				◎			
カリグリーン	炭酸水素カリウム	無機殺菌	NC		野				野			野：【野菜類登録】
カンタスドライフロアブル	ホスカリト	アミト	7						◎			果菜類では浸透性の展着剤、葉面液肥との混用による薬害に注意する。
ガッテン乳剤	フルチアニル	その他	U13		◎							
キノンドーフロアブル	有機銅	有機銅	M01					◎				クラウン部散布。
ゲッター水和剤	ジエトフェンカルブ・チオファネートメチル	混合剤	10・1					◎				
ケンジャフロアブル	イソフエタミト	アミト	7		◎				◎			
コサイド3000	水酸化第二銅	無機殺菌	M01					◎				
サプロー乳剤	トリホリン	SBI	3		◎							
サルファール	硫黄	無機殺菌	M02		◎							
サンヨー	DBEDC	有機銅	M01		◎				◎			うどんこ病登録：苗浸漬の場合は、瞬間～5分間苗浸漬。
サンリット水和剤	シメオゾール	SBI	3		◎			◎				
シグナムWDG	ピラクトロビン・ホスカリト	混合剤	11・7		◎			◎	◎			
ジーファイン水和剤	炭酸水素ナトリウム・無水硫酸銅	混合剤	NC・M01		野							野：【野菜類登録】 幼苗期、高温時の散布を避け、他剤との混用、近接散布では注意を要する。
ジマンダイセン水和剤	マンゼブ	有機硫黄	M03					◎				
ジャストミート顆粒水和剤	フェンハキサミト・フルジチゾニル	混合剤	17・12						◎			
ショウチノスケフロアブル	フルチアニル・メハニピリム	混合剤	U13・9		◎				◎			
スクレアフロアブル	マンデーストロビン	ストロビリン	11		◎		◎					
スコア顆粒水和剤	ジフェノコナゾール	SBI	3		◎							
ストロビーフロアブル	クレソキシムメチル	ストロビリン	11		◎							浸透性展着剤との混用は避ける。施設内が高温多湿な場合は、散布後十分な換気を行う。
スミレックス水和剤	フロシミト	ジカルボキシミト	2				◎		◎			
セイビアーフロアブル20	フルジチゾニル	その他	12					◎	◎			
セレナーデ水和剤	バチルスズバチス	生物農薬	BM02		◎				野			野：【野菜類登録】

農薬名	成分名	系統名	FRACコード	適用病害虫名							注意事項		
				萎黄病	うどんこ病	疫病	細菌核病	炭疽病	灰色かび病	芽枯病			
ダイマジン	イミダクワジンアルベシル酸塩・フェンヘキサミド	混合剤	M07・17		◎				◎				
チオノックフロアブル	チラム	その他	M03					◎					
デランフロアブル	ジチラン	その他	M09					◎					
トリフミン水和剤	トリフルミゾール	SBI	3		◎								高温時の散布は薬害の恐れがある。
ニマイバー水和剤	ジエトフェンカルブ・ヘノシル	混合剤	10・1					◎	◎				
ネクスターフロアブル	イピラサム	その他	7		◎				◎				
ハーモメイト水溶剤	炭酸水素ナトリウム	無機殺菌	NC		野				野				野：【野菜類登録】
パレード20フロアブル	ピラジフルミド	その他	7		◎				◎				
パンチョTF顆粒水和剤	シフルフェナミド・トリフルミゾール	混合剤	U06・3		◎								
ピカットフロアブル	ペンチホヒラト・メハニピリム	混合剤	7・9		◎				◎				
ファンタジスタ顆粒水和剤	ピリベンカルブ	ストロビルリン	11					◎	◎				
ファンベル顆粒水和剤	イミダクワジンアルベシル酸塩・ピリベンカルブ	混合剤	M07・11		◎			◎	◎				
フルピカフロアブル	メハニピリム	アピルピリミジン	9		◎				◎				
プロパティフロアブル	ピリオフェノン	その他	50		◎								
ベルコート水和剤	イミダクワジンアルベシル酸塩	その他	M07		◎			育					育：【育苗期のみ適用】
ベルコートフロアブル	イミダクワジンアルベシル酸塩	その他	M07		◎			◎	◎				
ペンレート水和剤	ヘノシル	ベンゾイミダゾール	1		◎			◎					
ペンコゼブ水和剤	マンゼブ	有機硫黄	M03					◎					
ボトキラー水和剤	バチルスズブチリス	生物農薬	BM02		野				野				野：【野菜類登録】 薬剤はダクト取り付け口付近からダクト内に投入する。暖房機が数時間以上運転される条件下で使用する。
ポリオキシシンAL水和剤	ポリオキシシン複合体	抗生物質	19		◎				◎				
ポリオキシシンAL水溶剤	ポリオキシシン複合体	抗生物質	19		◎				◎				【アザミウマ類、ハダニ類にも適用】
ポリオキシシンAL乳剤	ポリオキシシン複合体	抗生物質	19		◎								
モレスタン水和剤	キノキサリン系	その他	M10		◎								
ユニフォーム粒剤	アゾキシストロビン・メタラキシルM	混合剤	11・4			◎							
ラミック顆粒水和剤	イミダクワジンアルベシル酸塩・ピリオフェン	混合剤	M07・50		◎				◎				
ラリール乳剤	マイクロブタニル	SBI	3		◎								
ランマンフロアブル	シアゾフアミド	その他	21			◎							
リドミル粒剤	メタラキシル	アミド	4			◎							
リドミルゴールドMZ	マンゼブ・メタラキシルM	混合剤	M03・4			◎							
ルビゲン水和剤	フェナリモル	SBI	3		◎								
レーバスフロアブル	マンジプロパミド	アミド	40			◎							
ロブラー水溶剤	イプロジホ	ジカルボキサイド	2				◎		◎				
ICボルドー66D	塩基性硫酸銅	無機殺菌	M01					◎					高温時の散布を避け、他剤との混用では注意を要する。

農 薬 名	成 分 名	系 統 名	FRAC コード	適 用 病 害 虫 名							注 意 事 項
				萎 黄 病	う ど こ 病	疫 病	菌 核 病	炭 疽 病	灰 色 か び 病	芽 枯 病	
< く ん 煙 剤 >											
硫 黄 粒 剤	硫黄	無機殺菌	M02		◎						専用の電気加熱式くん煙器でくん煙する。
スミレックスくん煙顆粒	プロシメトン	ジカルボキシイミド	2						◎		
トリフミンジェット	トリフルミゾール	SBI	3		◎						
フルピカくん煙剤	メニピリム	アニリピリジン	9		◎				◎		
ロブラールくん煙剤	イロシボ	ジカルボキシイミド	2						◎		

注) イミダジン酢酸塩とイミダジンアルベシ酸塩は、成分が「イミダジン」として取り扱われるので、使用の際は有効成分の総使用回数を超えないように注意する。

(11) イチゴ
イ 殺虫剤

農 薬 名	成 分 名	系 統 名	I R A C コード	適 用 病 害 虫 名										注 意 事 項	
				ア ザ ミ ウ マ 類	ミ カ ン キ イ ロ ア ザ ミ ウ マ	コ ナ ジ ラ ミ 類	ア ブ ラ ム シ 類	ワ タ ア ブ ラ ム シ	オ オ タ バ コ ガ	ハ ス モ ン ヨ ト ウ	コ ガ ネ ム シ 類 幼 虫	ハ ダ ニ 類	ネ グ サ レ セ ン チ ュ ウ 類		イ チ ゴ メ セ ン チ ュ ウ
ア ー デ ン ト 水 和 剤	アクリナトリン	ピレスロイト [®]	3A		◎		◎						◎		
ア カ リ タ ッ チ 乳 剤	プロピレングリコールモノ脂肪酸エステル	天然物由来											野		野:【野菜類登録】
ア ク セ ル ベ イ ト	メタフルミゾン	その他	22B							◎					
ア ク タ ラ 粒 剤 5	チアメキシム	ネオニコチノイド [®]	4A				◎								
ア グ リ メ ッ ク	アバメクチン	マクロライド [®]	6									◎			
ア グ ロ ス リ ン 乳 剤	シペルメトリン	ピレスロイト [®]	3A				◎								
ア タ ブ ロ ン 乳 剤	カルフルアズロン	IGR	15		◎					◎					
ア デ イ オ ン 乳 剤	ペルメトリン	ピレスロイト [®]	3A				◎								
ア ド マ イ ヤ ー 1 粒 剤	イミダクロプリト [®]	ネオニコチノイド [®]	4A				◎								
ア ニ キ 乳 剤	レピメクチン	マクロライド [®]	6						◎	◎					
ア フ ェ ー ム 乳 剤	エマメクチン安息香酸塩	マクロライド [®]	6						◎	◎		◎			
ア フ ィ パ ー ル	コレマンアフラバチ	生物農薬					施								施:【野菜類(施設栽培)登録】
ア ル バ リ ン 粒 剤	ジノテフラン	ネオニコチノイド [®]	4A					◎							
ス タ ー ク ル 粒 剤	シノテフラン	ネオニコチノイド [®]	4A					◎							
ウ ラ ラ D F	フロニカミド [®]	その他	29			◎	◎								
エ コ ピ タ 液 剤	還元澱粉糖化物	天然物由来				◎	◎					◎			
カ ウ ン タ ー 乳 剤	ハルロン	IGR	15	◎						◎					
カ ス ケ ー ド 乳 剤	フルフェノクスロン	IGR	15	◎						◎					
カ ネ マ イ ト フ ロ ア ブ ル	アセキシル	殺ダニ	20B									◎			
カ ル ホ ス 乳 剤	イキシチオン	有機リン	1B										仮		仮:【仮植床のみ】
カ ル ホ ス 微 粒 剤 F	イキシチオン	有機リン	1B										仮		仮:【仮植床のみ】
カ ル ホ ス 粉 剤	イキシチオン	有機リン	1B										仮		仮:【仮植床のみ】
グ レ ー シ ア 乳 剤	フルキサタミド [®]	その他	30	◎					◎	◎		◎			
コ テ ツ フ ロ ア ブ ル	カルフェナピル	その他	13		◎					◎		◎			
コ ル ト 顆 粒 水 和 剤	ピリフルキサジン	その他	9B			◎	◎								
コ レ ト ッ プ	コレマンアフラバチ	生物農薬					施								施:【野菜類(施設栽培)登録】
コ ロ マ イ ト 水 和 剤	ミルベメクチン	マクロライド [®]	6									◎			
コ ロ マ イ ト 乳 剤	ミルベメクチン	マクロライド [®]	6									親			親:【親株床のみ】
サ フ オ イ ル 乳 剤	調合油	その他				◎						◎			
サ ン マ イ ト フ ロ ア ブ ル	ピリダベン	殺ダニ	21A			◎		◎				◎			
シ ス テ ム ミ ヤ コ く ん	シヤコアフラバチ	生物農薬											施		施:【施設栽培登録】

(11) イチゴ
ウ 土壤消毒剤

農 薬 名	成 分 名	RAC コード I:殺虫 F:殺菌	適 用 病 害 虫 名											注 意 事 項	
			ケ ラ	ネ キ リ ム シ 類	ハ リ ガ ネ ム シ 類	コ ガ ネ ム シ 類 幼 虫	セ ン チ ユ ウ 類	ネ グ サ レ セ ン チ ユ ウ 類	ネ コ ブ セ ン チ ユ ウ 類	青 枯 病	萎 黄 病	萎 凋 病	疫 病		炭 疽 病
ガスタード微粒剤 バスアミド微粒剤	ガツメット	I:8F								◎	◎	◎	◎	◎	
キルパ	カーハムナトリウム塩	I:8F						◎	◎		◎				
クロールピクリン	クロルピクリン	I:8B	◎	◎	◎		◎				◎			◎	
クロピク80 ドジョウピクリン ドロクロー	クロルピクリン	I:8B		◎	◎		◎				◎			◎	
クロピクテーパー	クロルピクリン	I:8B						◎			◎		◎		
クロピクフロー	クロルピクリン	I:8B						◎	◎		◎				
クロルピクリン錠剤	クロルピクリン	I:8B					◎				◎		◎	◎	
ソイリー	クロルピクリン・D-D	I:8B・8A						◎	◎		◎			◎	
ダブルストッパー	クロルピクリン・D-D	I:8B・8A						◎	◎		◎			◎	
ディ・トラペックス油剤	メチルイソチオシアネート・D-D	I:8F・8A					◎				◎	◎	◎	◎	
テロ D C 油 剤 D - D	D-D	I:8A				◎		◎	◎						
トラペックスサイド油剤	メチルイソチオシアネート	I:8F					◎				◎				

(11) イチゴ
エ 残渣処理剤

農 薬 名	成 分 名	I R A C コ ー ド	使用目的	注 意 事 項
キルパー	カーバムトリウム塩	8F	前作のトマト又はミニトマトのコナジラミ類蔓延防止	使用目的以外での 使用不可
			前作の野菜類又は花き類・観葉植物の古株枯死	
			前作の野菜類又は花き類・観葉植物のアザミウマ類蔓延防止	
			前作のきゅうりのコナジラミ類蔓延防止	
			前作のイチゴのネグサレセンチュウ蔓延防止	
			前作のトマト、ミニトマト、ピーマン、とうがらし類又はきゅうりのネコブセンチュウ蔓延防止	
			前作のナスのフザリウム立枯病の蔓延防止	
			前作のねぎの収穫残渣に寄生したクロバネキノコバエ類蔓延防止	
			前作のキュウリの褐斑病の蔓延防止	

オ 病虫害防除法（イチゴ）

（ア）青枯病 *Ralstonia solanacearum*

（防除のねらい）

ランナーの養成期の被害が問題となる。病原細菌はイチゴの他、トマト等多くの作物を加害する。水の停滞する場所や排水不良のは場に発生しやすい。

（耕種的防除法）

- （１）床土は健全土壌を用いる。
- （２）発病は場は５年以上輪作する。
- （３）排水をよくする。

（イ）萎黄病 *Fusarium oxysporum*

（防除のねらい）

育苗ほで６月上旬頃から発病し、８月に病徴が顕著になる。発病初期は新葉が黄緑色になり、小葉が小さく、船型に巻いて奇形となる。その後、萎黄症状が激しくなり、株全体が枯死する。本病はランナーの栄養繁殖による伝染が主である。

（耕種的防除法）

- （１）発病株は周りの土壌とともに除去する。
- （２）親株は一斉に更新し、無病親株から採苗する。
- （３）収穫後の残渣はできるだけ取り除いて、残根の分解促進に努め、土壌消毒を徹底する。
- （４）上記親株更新と土壌消毒は一方だけ行っても効果がないので必ず両方行う。

（ウ）うどんこ病 *Sphaerotheca humuli*

（防除のねらい）

病原菌は親株を通じて苗に伝染し、イチゴだけで世代を繰り返す。乾燥および多湿のいずれでも発生する。生育の衰えたものほど多発しやすい。定植前の育苗期防除を徹底し、本ぼに病原を持ち込まない。

（耕種的防除法）

- （１）無病苗を植える。
- （２）発病した果実、葉などは取り除き持ち出す。
- （３）通風をよくする。

（化学的防除法の注意事項）

水和剤には展着剤を加用する。

（エ）疫病 *Phytophthora nicotianae*

（防除のねらい）

生育温度は30℃前後が適温で、夏季高温時の８～９月に多く発生する。病原菌はクラウン部から根や葉柄基部にまで侵入し発病する。このため、苗床において急激な萎ちょう、立枯れをおこし、欠株となることがある。

（耕種的防除法）

- （１）無病親株から採苗する。
- （２）雨よけ育苗を行う。
- （３）雨水等により伝染するので、苗床に水が溜まらないように排水対策をとる。
- （４）土壌消毒剤や太陽熱による土壌消毒を行なう。
- （５）発病株は周りの土壌とともに除去する。

（オ）菌核病 *Sclerotinia sclerotiorum*

（防除のねらい）

（耕種的防除法）

}] キュウリの項参照

(カ) 炭疽病 1. *Colletotrichum gloeosporioides* (*Glomerella cingulata*)

2. *Colletotrichum acutatum*

(防除のねらい)

1. *Colletotrichum gloeosporioides* (*Glomerella cingulata*)

葉柄や葉身にも病斑を生じるが、クラウン部、ランナーに最も発生しやすく、萎凋、立枯れをおこす。発生を防止するには無病親株から苗をとることが基本で、親株、採苗時、育苗時をとおして雨よけや定期的な薬剤防除など総合的な防除を実施する。

2. *Colletotrichum acutatum*

クラウン部は侵害されないため萎凋は起こさないが、葉柄や葉身、ランナーに病斑を生じ、葉身上の病斑は大型の黒色不整形を呈する。発生を防止するには雨よけ育苗の効果が高い。

(耕種的防除法)

- (1) 無病親株から採苗する。
- (2) 親株から育苗ほまで雨よけ栽培を行う。
- (3) 雨水やかん水時の土砂の跳ね返りを防ぐために、ベンチ育苗を行う。
- (4) 降雨中の摘葉作業は控える。
- (5) 萎凋、枯死した株は、直ちに除去し、ほ場外に持ち出して処分する。

(化学的防除法の注意事項)

- (1) 新葉展開開始期から定期的な薬剤散布を開始する。
- (2) 薬剤散布は概ね10日間隔で行い、発病がみられた場合は散布間隔を短縮する。
- (3) 薬剤は株元まで届くように丁寧に散布する。
- (4) 土壌消毒剤で消毒する場合は、残渣がよく分解してから行う。この時、クラウン等の収穫残渣はできるだけ取り除いておく。

(キ) 灰色かび病 *Botrytis cinerea*

(防除のねらい)

枯死葉、老化葉、枯死花卉が最初の発生部分となり、伝染する。気温が20℃前後の時に発生は多い。ハウス内が過湿状態にならないようにし、薬剤散布は下葉かき後の葉数の少なくなった時期に行うと効果的である。

(耕種的防除法)

- (1) 病果、病葉は早目に摘除しハウス外に持ち出し、混み合った下葉は除去する。
- (2) 排水並びに通風をよくする。
- (3) マルチ栽培をする。

(ク) 芽枯病 *Rhizoctonia solani*

(防除のねらい)

病原菌は土中で生存し、土壌伝染するとともに、ランナーを通じて苗に感染し、苗伝染することも多い。防除は薬剤散布だけでなく、肥培管理を適切に行う必要がある。22℃以上の高温、特に、25～30℃で激しく発病する。

(耕種的防除法)

- (1) 発病地から親株はとらない。
- (2) 被害株は焼却する。
- (3) 排水を図り、下葉の除去を行い通風をよくする。

(化学的防除法の注意事項)

発蕾期に芽の部分を主体に散布する。

(ケ) 輪斑病 *Dendrophoma obscurans*

(防除のねらい)

病原菌は被害部で越冬し、梅雨期～10月ごろにかけて葉、葉柄、ランナーに発生する。採苗床から薬剤散布による防除を行わなければならないが、枯死葉や病葉の除去などのほ場管理も必要である。

(耕種的防除法)

- (1) 無病株から採苗する。
- (2) 被害葉は早目に摘み取り処分する。
- (3) 下葉を取り除き通風を図る。

(コ) チャノキイロアザミウマ

(防除のねらい)

施設では3月以降急激に増加するので注意する。新芽、新葉、幼果を好み、花には寄生しない。防除は開花期までに徹底し、春先のハウス換気に伴う侵入を警戒する。

(耕種的防除法)

ヒラズハナアザミウマの項参照。

(サ) ヒラズハナアザミウマ

(防除のねらい)

施設では3月以降急激に増加するので注意する。花に寄生し、花床を食害するため、不稔になったり、果実が肥大しても果皮が茶褐色になる。

花や果実に被害が出てからは手遅れなので、春先のハウス換気に伴う侵入を警戒し、早期発見に努める。

(耕種的防除法)

- (1) ハウスの開口部に防虫ネットを張り、侵入を防止する。
- (2) 栽培終了後は残渣をただちに処分し、周囲への分散を防止する。
- (3) ハウス周辺の雑草は増殖源となるので環境整備に努める。

(シ) ミカンキイロアザミウマ

(防除のねらい)

寄生範囲が広く、野菜類の他、マメ類、果樹、花き類など、多くの作物を加害する。低温耐性が強く、露地でも越冬が可能である。施設では3月以降急激に増加するので注意する。また、薬剤に対する感受性は他のアザミウマとは異なるので、注意が必要である。

早期発見に努め、発生初期から防除を行う。青色に誘引されるので、これらの粘着板トラップを設置し、防除の目安にするとよい。

(耕種的防除法)

- (1) ハウスの開口部に防虫ネットを張り、侵入を防止する。青色のネットは本種を誘引する可能性があるので使用しない。
- (2) 栽培終了後は残渣をただちに処分し、周囲への分散を防止する。
- (3) ハウス周辺の雑草は増殖源となるので環境整備に努める。

(ス) アブラムシ類

(防除のねらい)

露地・ハウスを通じて周年発生する。アブラムシ類が寄生している苗をハウスに持ち込むと多発することがあるので、定植前までに十分防除を行う。ワタアブラムシはウイルス病を媒介するのでウイルスフリー株では特に防除を徹底する必要がある。

(セ) オオタバコガ

(防除のねらい)

(耕種的防除法)

} トマトの項参照

(ソ) ハスモンヨトウ

(防除のねらい)

ハクサイの項参照

(タ) コガネムシ類

(防除のねらい)

越冬後の幼虫は本ぼ又は親株を加害し、仮植床又は本ぼ定植時には第一世代幼虫が主体に加害する。仮植期、早植の定植初期に幼虫加害が目立つので、仮植床植付時又は本ぼ定植時に薬剤を土壌施用する。

(耕種的防除法)

- (1) 仮植、定植前に約1か月間冠水すると非常に有効である。
- (2) 未熟堆肥、野積み堆肥は使用しない。

(チ) ハダニ類

(防除のねらい)

本ぼでの発生は苗からの持ち込みによることが多いので、苗床からの防除を十分に行う。下葉での発生が多いので薬剤は散布むらがないよう丁寧に行い、抵抗性の発達を防ぐために同一薬剤の連用は避ける。密度が増加してからの防除は困難なので初期防除に努める。

(耕種的防除法)

- (1) 下葉かきを定期的に行う。
- (2) ほ場周辺の雑草は除去する。

(化学的防除法の注意事項)

- (1) 薬剤は下葉かきを行ってから葉裏にかかるよう丁寧に散布する。
- (2) ほ場によって薬剤感受性が異なるので、散布後は必ず防除効果を確認する。
- (3) 薬剤感受性の低下を防ぐため同一系統薬剤の連用を避け、系統の異なる薬剤のローテーション散布に努める。

(ツ) ネグサレセンチュウ類

(防除のねらい)

根ぐされ萎凋症発生要因の1つにセンチュウの寄生がある。疑いのあるほ場は土壤消毒を行う。

(テ) イチゴメセンチュウ

(防除のねらい)

主としてランナーによって親株から子苗に移動するが、雨水でも移動する。土壌中のものは茎葉を伝って寄生する。健全苗の使用がまず大切である。被害株の早期発見に努め薬剤散布する。